

Shake Hands 135 号 2024 年 12 月 1 日

常滑国際交流協会 〒479-0837 常滑市新開町 5-58 常滑商工会議所内
電話・FAX 0569-34-4797 メール tia@japan-net.ne.jp
URL : <https://www.japan-net.ne.jp/~tia/>

みなさんこんにちは、常滑国際交流協会の機関誌「Shake Hands」の 135 号をお届けします。

135 号ではこの 12 月 14 日から 3 月まで各月に分けて 4 回開催する「通訳ボランティアガイド講習」のご案内とこの夏開催された「Touch!Tokoname」のご報告、さらに新入会員山本由梨子さんに「日米草の根交流コーディネーター派遣（JOI）プログラム」をご紹介します。お楽しみください！

ボランティア通訳ガイド勉強会の出欠申込

私たちの住む常滑は陶器の街としての長い歴史を持ち、国際空港を介して国際交流を担う玄関都市です。

常滑の魅力をしっかり伝える通訳ガイドの養成講座を 12 月 14 日から 3 月 15 日までの月 1 回、計 4 回、土曜日の昼食後午後 1 時半から 2 時間の予定で開催します。ふるってご参加ください。

開催地: 第一回 2024 年 12 月 14 日(土) 13:30- INAX ライブミュージアム

開催地: 第二回 2025 年 1 月 18 日(土) 13:30- 常滑 陶の森資料館

開催地: 第三回 2025 年 2 月 15 日(土) 13:30- 大野町 開催地 未定

開催地: 第四回 2025 年 3 月 15 日(土) 13:30- 南陵地区 開催地 未定

任意の回に複数参加できます。

参加費 500 円/回 国際交流協会会員は無料です。

[お申し込みはここ](#)をクリック

もしくは右の QR コードからリンクする google form
でお申し込みください。



申込はコチラ

上記の Google form にアクセスできない方は、
下記の電話 (FAX) ・ e-mail を用いて、お申し込みください。

お問い合わせ:

TEL 0569-34-4797 090-3854-9871 e-mail : tia@japan-net.ne.jp

アーティスト・イン・レジデンス・プログラム「TOUCH!TOKONAME」を終えて

片岡 麻美

2024年9月から10月にかけて常滑市制70周年特別記念事業の一環として実施したアーティスト・イン・レジデンス・プログラム「TOUCH!TOKONAME」は、おかげさまで無事にアーティストの旅立ちを迎えることができました。

常滑市国際交流協会会員の皆様をはじめ、たくさんの方々に支えていただきましたことを、この場を借りて御礼申し上げます。

「TOUCH!TOKONAME」は、私がコロナ禍以前から5年ほど温めていた企画です。国際文化交流を実施する機関で勤務していた私は、「国際とこなめやきものホームステイ（IWCAT）」に関心を抱き、関係者の皆様にヒアリングさせていただく中で、市民の力で25年以上もの間、「やきもの」を通じた国際交流を行ってきたという事実 zu 大きな感銘を受けました。以来、仕事の中だけでなく仕事外にも学びの場を広げながら、他地域の事例などもリサーチしてまいりました。そして、IWCATの良さを引き継ぎつつ、新しい形で常滑という特徴ある町とアートをグローバルに繋げたいという想いから、常滑市制70周年を機にCROSS ART TOKONAMEという団体を立ち上げ、常滑市で約50日間アーティストが滞在制作を行う、アーティスト・イン・レジデンス・プログラム「TOUCH!TOKONAME」をスタートしました。

参加するアーティストを公募で呼びかけたところ、656組のアーティストから応募が殺到し、改めて常滑という町が持つパワーを実感しました。約9割が海外からの応募で、90以上の国・地域から応募があったことも大きな驚きでした。専門家の先生方のお力もお借りしながら審査を行い、最終的にクルトゥラ・コレクティブ（インドネシア）と金子未弥さん（日本）という二組のアーティストが常滑で滞在制作することになりました。



9月にアーティストたちが常滑に到着してからは、怒涛のような日々が続きました。アーティストの町案内は常滑市内の小学生たちにお願ひしました。子どもたちは6月から案内の準備を進め、自分たちで決めた案内先を、時には英語を交えながら、自分のことばで案内してくれました。子どもたちによる町案内はアーティストにとっても印象に残ったようで、クルトゥラ・コレクティバは子どもたちのためのワークショップを開催したり、子どもたちをテーマとした作品を制作してくれました。金子さんも子どもたちが紹介したものからインスピレーションを得て作品を制作するなど、大きな反響がありました。

アーティストたちは市民との交流にも積極的で、常滑市民の家庭へのホームステイや、制作場所を市民に開いたオープンスタジオ／Crit というイベントの開催、常滑高校でのトークやワークショップなど、約50日間の滞在でさまざまな交流を行うことができました。市民がインドネシア料理やインドネシアの伝統音楽などに触れる機会も多くありました。

成果発表展において、クルトゥラ・コレクティバは常滑での滞在中に目にしたものや出会った人などを、常滑の過去・現在・未来それぞれのメッセージを込めてメモリアルに表現したバティック（ろうけつ染め）の作品や写真作品を多く展示しました。金子未弥さんは町の中で目にする電線管に着目し、杉江製陶株式会社や愛知県立芸術大学、地域の陶芸家などのご協力のもと、電線管を粒子加速器に見立てて「未発見の小惑星観測所」というプロジェクトで複数の作品を展示しました。

常滑の「ひと」「もの」「まち」を、普段目にするものではない表現方法や現代美術の視点によって新しい形で表現したアーティストの作品は、市民にとっても新鮮で新たな気づきのあるものになったのではないかと思います。最後は笑顔で旅立ちを見送り、アーティストと温かい絆を築くことができました。

初めてのプログラムで、思い通りにならないことも多く、頭を抱えることも多々ありましたが、支えてくれる仲間の皆さんや、応援して下さる皆さんのおかげで、何とか完走することができました。CROSS ART TOKONAME は来年度以降も、常滑の町とアートの交差点として活動を続けてまいりたいと思っております。

引き続きご応援いただけると幸いです。



TOUCH!TOKONAME 事業スケジュール

2023 年	12/10	アーティスト公募開始
2024 年	4/23	アーティスト決定
	6/15, 7/6	市民ダイアログ（プレイベント）
	9/12～	プログラム開始 アーティスト到着
	9/14	オープニングセレモニー
	9/15	こどもまちガイドツアー
	9/21-23	ホームステイ
	9/28	オープンスタジオ／Crit
	10/15, 17	常滑高校でのトーク、ワークショップ
	10/20	こどもワークショップ
	10/19-27	成果発表展
	10/31	アーティスト出発



「あたり前」なんてない ～アメリカでの国際交流事業に携わって～

山本 由梨子

海外に興味を持ち始めたのは、5歳の頃に聴いた「We Are The World」の曲がきっかけでした。英語の歌詞なので当然、歌詞の意味などわかりませんでした。しかし、歌声と曲から伝わるパワーが印象的でした。

中学生になり、授業で英語を習い始めたので、「We Are The World」の歌詞を和訳しました。すると、それが遠い国アフリカの飢饉を救うためのチャリティーソングであることを知りました。その日から、国際協力や国際交流、外国語を意識するようになりました。

大学では主に、異文化理解やファシリテーションの仕方、英語を学びました。そして、フィールドワークの授業で、カンボジアへ行きました。生まれて初めて海外の空気に触れることで、机上の学習だけでは学べないことがたくさんあると気づきました。カンボジアを皮切りに、何カ国か海外に足を運び、実際に経験することの重要性を学びました。

大学在外中に、青年海外協力隊に興味を持ちました。専門性を障がい児・障がい者支援に決め、卒業後は日本でまず知識と経験を積むために3年働くことを決めました。そして応募しましたが、私に合う要請がないと判断され、合格には至りませんでした。そんな中見つけたのが、日米草の根交流コーディネーター派遣（JOI）プログラムです。

日米草の根交流コーディネーター派遣（JOI）プログラム

アメリカの山岳部、中西部、南部などの比較的日本人の少ない地域に派遣され、草の根レベルで日本への関心と理解を深めることを目的としたプログラムです。地域に根ざした交流を進めるための日本人コーディネーターを毎年8～10名ほど、2年間派遣します。

人それぞれ派遣される州や施設は様々で、大学や日米協会、文化センターやミュージアムなどでした。

コーディネーターの活動内容は主に、折り紙や書道、日本の踊りや日本料理の紹介など多岐にわたります。私は、南部のケンタッキー州の、ケンタッキー日米協会（Japan/America Society of Kentucky：以下 JASK）に派遣されました。

ケンタッキー州について

ケンタッキー・ダービー（競馬）や、バーボン・ウィスキーの発祥地、ケンタッキー・フライドチキン（KFC）の本拠地として有名です。トヨタ、サントリーなどの約150社の日本企業があり、日本人人口も約6,500人です。

活動について

主な活動内容は、ケンタッキー日米協会（JASK）主催のイベントの手伝いや、オンライン日本語クラス、文化紹介クラスの講師でした。

派遣された1年目は、様々な施設を訪問して繋がりを築くことに力を入れました。主に図書館、小中学校、高校、大学、植物園、障がい者支援施設、教会、地域の会社等に声をかけ、文化紹介をさせてもらえないか尋ね歩く日々でした。2年目は、1年目に繋がった施設や人々同士を繋げることに尽力しました。

週に 2,3 回の文化紹介クラスや日本語クラスがあったため、それ以外の日は準備をしていました。文化紹介クラスの内容は、折り紙、書道、絵手紙、盆踊り、ソーラン節、浴衣の着付け、茶道、日本の遊び、料理教室（おにぎり、寿司、お弁当）等で、幅広い活動に挑戦しました。



福祉施設での盆踊りクラス



ファミリーイベントでの書道体験

よさこいダンスチーム結成

派遣されて5か月がたったころ、よさこいダンスチームを結成しました。目的は、ナッシュビルという大きな都市の祭りで、ソーラン節を披露するためでした。メンバーとソーラン節を練習して、実際に祭りで披露すると、「もっと違う祭りでも踊りたい!」「他の踊りも習いたい!」という声上がり、チームを続けることにしました。彼らと一緒にソーラン節や盆踊りを練習し、結成後1年7か月で約11回ほど、祭りやイベントで披露してきました。また、地域の大学や福祉施設でもソーラン節クラスをする際は、メンバーが駆けつけてくれました。彼らの熱意がなければ、続けて来られなかったと思います。日本の踊りを通して、祭りの心を伝えられたのではないかと思います。感慨深いです。メンバーは、私が帰国した後もチームを引き継ぎ、新しい踊りやイベントに挑戦し続けています。



ナッシュビル桜祭りでソーラン節を披露



大学で法被とハチマキ体験

ボランティアグループ結成

アメリカ滞在2年目に、私の文化紹介活動を手伝っていただくためのボランティアグループを結成しました。きっかけは、中学1年生の日本の女の子との出会いでした。私の盆踊りイベントに参加してくれた彼女は、将来海外で日本の文化紹介をすることを夢見ていました。それから、私の文化紹介クラスにボランティアとして参加してもらうようになりました。そこで気づいたことが、自分の機会を彼女と共有できていること、お互いの知識を共有し合えることでした。そして、ケンタッキー州には、日本文化を紹介したいけれど機会がない人が多く存在することにも気づきました。「日本」というものを通して、ボランティアと参加者が地域で繋がっていく姿をたくさん見てきました。とてもやりがいを感じると同時に、私の活動の意義を再確認することができました。



ボランティアグループのメンバー



ボランティア（左）参加者（右）の交流

まとめ

アメリカの生活で印象に残っているのは、人々のコミュニケーション方法です。自分が希望することは、言わないと伝わらないと感じる場面が多かったです。友人と話していても、どんな気持ちで何をしたいのか、言葉で伝えてくれる人が多かったです。察する文化に漬かってきた来た私は、それに慣れるのにはじめは苦労しました。しかし、慣れると、お互いに伝えたいことを伝え合うコミュニケーション方法が心地よいと感じました。

今回のアメリカ滞在は、私にとって、初めての海外長期滞在でした。短期滞在では見えない奥まった部分を知ることができたり、生活する上で困難だと感じることもありました。文化の異なる人々と過ごして感じたことは、自分にとっての「あたり前」が、他の人にとってはそうではないことがある、ということです。そして、どちらも間違いではない、ということ。もし誰かと関わっている中で、何かすれ違ってしまった時、『「あたり前」なんてない』と思うようにしています。この考え方があると、一旦止まって考えることができるからです。その上で、お互いに心地よく生活するにはどうしたらよいのか考えることができますと思います。私は、これからも恐れず挑戦し続け、さらに自分の経験を地元還元していきたいと思っています。